

キラリティー入門 その三

「対掌性」を認識した古代の日本人

左巻きと右巻きの縄文を

土器の装飾として配置した・・・

日本人のルーツは・・・

日本列島が大陸から切り離され、人類を含む動物は、独自の進化過程に入ったとされる（何万年か前?）。日本人は、遺伝子による推定では、日本列島で誕生したという。

そこで暮らす人々の知的な活動は、石器を道具として使い、狩猟で獲物を得る仕事から始まった。やがて、地球規模の温暖化に向かうと、日本列島には森林が拡大し、クリなどの果実が採れるようになる。

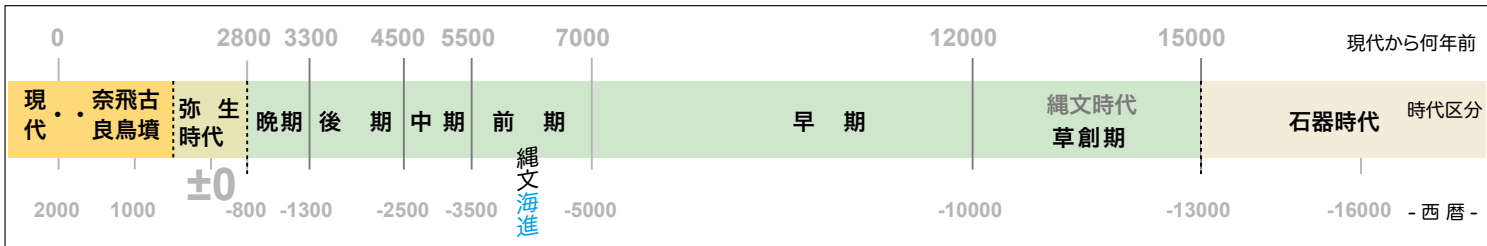
それまで移動を繰り返していた古代人は、住居をつくって定住化するようになる。列島の全域で発掘調査が進むと、各地で多数の住居跡が発見された。地面を掘ってつくられた「竪穴住居」と呼ばれ、そこには「土器」などが埋蔵されていた。日本人は土器を創作した・・・

「土器」は食料を煮炊きするために、粘土を捏ねて筒状の形に成形したのち素焼きで作られ、その表面は多様な文様で装飾された。主に、植物の茎などで擦った縄が使われたので、何時しか、「縄文土器」と呼ばれるようになる。

日本列島で縄文土器が使われた時代は、約一万五千年前（紀元前百三十二世紀ころ）に遡る。以後、驚くべきことに、ほぼ、二千三百年前（紀元前四世紀ころ）にかけて、古代人（縄文人）は日本列島で活動したのである。

世界的な視野において、煮炊きができる、「縄文土器」に類する土器は発見されていない。そこで、「縄文土器」は、日本の古代人の創作品といっても差し支えは無い。

本書の入門その三では、縄文土器の文様が左巻きと右巻きの縄文をもっていて、縄文人が左右双方に産まれた「キラリティー」を認識していたことに注目したい。対して、右ねじオシリに入った現代では、逆ねじが等しく配置されることは無くなった。



「縄」の時代が始まった・・・

古代の日本で、縄の文様を配した土器が作られ、使用された、一万年余りの時代は、「縄文時代」と呼称される。「石器時代」の終わり、紀元前130、000年前から、紀元前8000年、今から2800年前に至る、なんと、一万三千年余りの時になる。その経過を顧みること、現代に繋がる、以下、膨大な時間と付き合うことにしたい。

現代とは異なり、歴史上での異変歴史の区分を記録として、対処することができなかった時代のことなので、十把一絡げにして大まかに議論する・・・、というより手の打ちようが無い、云い方によれば、他になす術が無かった時代と考えたい。文字も、言葉も不明で、残されたのは、「土器」と、その表面に作られた図柄、文様だけなのである

縄文時代の土器は・・・

良く知られているように、明治十年（1877）、アメリカの生物学者モース（Edward Sillivester Morse）が横浜から新橋に向かう汽車の中から貝塚を見付けた。この「大森貝塚」から出土した土器を、彼は報告書の中で「Cord Marked Pottery」と呼んだ。その訳語が索紋、縄紋などを経

てようやく「縄文」に落ち着いたのである。縄文土器の発見の糸口となった大森貝塚は、J R京浜東北線・大森駅近くにあつて、遺跡庭園として整備され、線路脇には記念の碑が建っている。

縄文土器は北海道を除く日本各地で出土しているが、もつとも古いものは、AMS法（極微量の天然レベルの放射性炭素C14を高感度で計測する技術）で測定した値を暦年代に補正すると、約1万5千年前となる。

すでに述べたように、土器は世界各地で発見されているが、どれも二万年をわずかに越える程度の古さなので、素焼きの「縄文土器」は世界最古の土器ということになる。日本列島で何故、世界の何処よりも早く土器作りが始まったのか、その理由は解明されていない。

土器が発明されて・・・

石器や木製の器は本来形のあるものを加工して生活に供したもので、「自然物」だが、土器は人類が形の無いものから造形し

志木市埋蔵文化財センター
「縄文土器の展示コーナー」



た最初の発明品であり、「人工物」といつてよい。最古級の「草創期」（二万二千年から二万五千年前）の土器には煤や滓が附着していることが多く、煮炊き用であった。

狩猟で得られる動物性の食料に加えて、婦女子でも可能な植物性の木の実や根茎の採集によって、一定の土地への長期の滞留を促し、やがて定住生活に移行した。土器による煮炊きは欠かせないものとなる。

縄文人は、「竪穴式住居」に居住して狩りや漁を行い、木の実を採集して暮らしていた。この頃の主食はどんぐりだったが、そのままでは苦くて食べられないために、すり潰してから煮ることによってアクを抜いたのでは、と推測されている。

志木市内で発掘された縄文土器の調査から・・・

最寒冷期を記録した、二万九千年前から地球規模で温暖化に向かい、人々は定住することを始め、食料を煮たり貯蔵するための土器が出現した。土器には共通して縄文（縄目の文様）が見られたので、「縄文土器」と呼ばれ、「縄文時代」の名称が定着したのである。

縄文海進の時代

海面が上昇して海水が侵入し、現在の東京湾は北に「奥東京湾」を形成し、さらに北上して東西に二分され、紀元前六千年ころになると、西側の入江は川越近くまで入り込む。「縄文海進」と呼ばれ、海面は三メートルくらい上昇して、現・柳瀬川の流域は「古入間湾」と呼ばれる水域と化した。志木市の東方に当る宗岡地区は海面下に沈み、志木地区との境界は海岸となる。

気温は今よりも一、二度高く、温暖な気候のため、湧き水や海産物が豊かな丘陵の崖線には人々が好んで集まって居住した。志木市内の発掘調査によって、多数の縄文時代住居が発掘され、遺跡からは、多種多様な縄文人の遺物が出土している。特に、この時代の人々が食べたあと捨てた貝殻などが、「貝塚」として残され、重要な遺跡となった。



縄文海進のころ 現在の柳瀬川は「古入間湾」だった
古入間湾の対岸に所在していた「水子貝塚」と「城山貝塚」は対応する



復元された縦穴住居の内部
富士見市・水谷貝塚公園

前頁の図には、北上した「奥東京湾」がさらに「古人間湾」を形成する地形と、沿岸に残された「貝塚」の位置が記入されている。国内で発見された「貝塚」は二千五百個余りだが、ほぼ半分が関東地方に、しかも全体の四分の一近くは、東京湾の東沿岸、特に千葉の海沿いに集中している。

志木市には、現・志木中学校沿いの道路際（柏町四丁目）の斜面に「城山貝塚」が所在している。「城山」とは、この辺り一帯の字の名前で、周辺で縄文前期後葉の住居跡が発掘されたので、前期中葉（約六千年前）のものと同定されている。この貝塚は、何時でも目前にすることができ、志木市内最古のモノユメントとして極めて貴重である。

発掘調査が行われ、縄文人の遺物として、ヤマトシジミ・マガキ・ハマグリなど、合わせて十一種類の貝類が確認された。平成二年に立てられた志木市の史跡案内板によれば、淡水系の貝を主体とする縄文海進の最盛期に形成されたものと推定されている。

市内には、その他にも、幾つかの貝塚が確認されたが、農地として耕作され、或いは発掘・調査後に埋められて、地表には残されなかった。

城山の対岸に「水子貝塚」がある・・・

志木市の城山貝塚は規模が小さいが、その北には、もっと規模の大きな貝塚、「水子貝塚」が所在する。縄文時代には、海進によって、現在の柳瀬川に沿って入江が形成されていたので、「水子貝塚」の位置は、丁度、城山の北に当る対岸となる。規模の大きな「水子貝塚」は、縄文時代前期（5,500～5,000年前）の代表的な貝塚として、昭和四十四年、国の史跡に指定された。

貝塚と古えのムラを保存するために整備され、約四万平方メートル、周囲に全長約六百メートルの園路をもつ史跡として、「水子貝塚公園」がつけられた。公園内には「竪穴住居」が復元され、そのうちの二棟には、当時の居住生活の様子再現された。また、「水子貝塚公園資料館」が開館して、埋蔵されていた資料の多くが収納、展示されている。



水子貝塚公園全景

土器の展開を「編年」で辿る・・・

志木市の遺跡の発掘・調査はすでに半世紀にも及ぶ。市内の主な「縄文土器編年表」を使って、考察することにしよう。この表の「土器の形式」では、特に土器の「文様」に注目したい（土器編年と文様については、95頁の注釈を参照すること）。

志木市内の主な縄文土器編年表

土器の形式 (出現期土器郡)	区分	13000
(隆起線文系)	草創期	12000
爪形文系		11000
多縄文系		10000
撚糸文系 夏桶 荷 島 桶 荷 台 花 輪 原		9000
貝殻・沈線文系 田戸下層	早期	8000
条痕文系 野 島 島 鷗 ケ 山 茅 打 越 下 吉 井		7000
羽状縄文系 花 積 下 関 黒 山 黒 浜	前期	6000
諸磯 浮島・興津 十三 菅 掘 五 領 ケ 台	中期	5000
勝坂 阿玉台		4000
曾利 連弧文 加曾利 E 称名寺	後期	3000
堀之内 加曾利 B 安行 1・2		3000
安行 3	晚期	2300
千網		2300
	弥生時代	

◇約13,000～10,000年前の草創期は・・・

日本列島が大陸からは慣れる直前だったと推測される。短期間に寒暖が起こり、気候と環境の変化は厳しかったようだ。しかし、やがて温暖化が進み、氷河が溶けて海水面は上昇して、海が陸地に侵入する。「海進」といわれている。

貝類や魚類が新しい食料となったが、狩猟の獲物は、象や野牛などの大型哺乳動物から中・小の哺乳動物、鹿や猪などに変わっていった。

草創期の土器は「隆起線文系」で始まる。口縁（口の部分）近く、胴体上部に、粘土の帯の装飾をもつ。ついで、器面にヒトの爪の形などを押し付けた「爪形文系」の土器が現われる。さらに、つづく「多縄文系」と云われる土器には、縄を器面に押し付けて縄目をつけ、或いは、縄を回転させて縄文をつけ、さらに左撚りと右撚りの区別ができて、装飾は多様なものとなる。



隆起線文系土

http://www.tokamachi-museum.jp/bunka05_shishitei/shishitei_190101.html
十日町市博物館指定文化財



爪形文系土器

https://www.city.machida.tokyo.jp/smph/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08.html
町田市考古資料展示資料

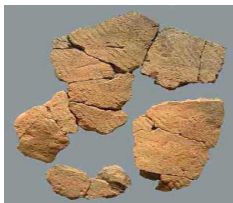
縄文時代の最初の段階では、無文土器を特徴としていたが、第二段階では、豆粒状の粘土粒を貼付けた「豆粒文土器」といわれる土器となり、隆起線文土器群へと進む。第三段階は爪形文土器群で、さらに第四段階が多縄文土器群である。

下図には、千葉県我孫子市の布佐余間戸遺跡から出土した多縄文系土器の一部と、これらの断片から推定された全体図を掲げた。サイズは、口径：17.6、高さ：15.5、底径：6.8センチメートルになる。土器の表面には縄文が施され、口唇部には刻みが施されている。出展は、「あびこ電脳考古博物館」

www.city.abiko.chiba.jp

「縄文草創期」の志木市内では・・・

「城山遺跡」から、「爪形文系土器」、一点が出土し、続いて、「多縄文系土器」が発見された。



注 縄文土器を理解するために・・・

長い年月の間に土器の形は変化したが、その流れを系統的に整理しようという努力が積み重ねられ、その基準を定めるために、考古学上で定めた「標準遺跡」（又は「基準遺跡」）から発掘された土器を「標準土器」（又は基準土器）として選び、その年代を比定するプロセスが提案された。

標準遺跡 (type site) あるいは標準遺跡 (standard site) は、考古学上の遺構、遺物、さらに、それらの関連性を集合して定義される。特定の型式・形式・様式、あるいは、年代、文化期、文化層の命名、時期区分名の命名の契機となった遺跡、遺構、遺物が検出された遺跡自身のことである。縄文遺跡は関東地方に密集しており、大部分の「標準遺跡」は現・東京都一帯から選ばれている。

縄文時代の区分は六つ

前記の「標準土器」という指標で区分され、承認されたるに到ったのは、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という区分である。

「土器編年」とは？

文字も無かった時代のことなので、土器が制作された実年代・絶対年代は分らない。そこで「土器編年」という概念で年代を論議することになった。この土器の年代は、それより古い、いや新しい、という相対的な、しかも曖昧な推定である。しかし、編年という概念によって、時間の物差しができ、例えば、同じ時期に、同じ型式の土器が分布する地域と、別の型式が広がる地域の時代区分の論議などは容易になる。

◇草創期につづく縄文早期は・・・

約10,000～6,000年前で、日本列島は大陸から全く離れて島国となる。ドングリやクルミなどの堅い果実は、栽培する農法が形成されて、良き食料資源となった。狩猟用の弓矢も普及し、漁漁が活発化して、捨てられた貝類が残され、後の世に「貝塚」が出現する。

「縄文早期」に志木市内で検出された遺構は・・・

「早期」の土器とされる「撚糸文系」として、夏島式と判断される土器が発見され(志木市史通史編)、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものではあろうか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が出土した。また、早期後半の条痕文系土器(主に茅山式)の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市域低地部への海水侵入が激しくなり、陸上と内海の双方で食料の獲得が始まり、人口が増加して、定住化へと向かっていたようだ(志木市史通史編)。

「中道遺跡」の調査で、早期末葉(条痕文系土器の時代)の住居跡一軒が、また、「田子山遺跡」では、早期の撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土した。その後の発掘で、「富士前」・「新邸」・「城山遺跡」から撚糸文系土器が数点出土し、「中野・田子山遺跡」では、炉穴に伴って条痕文系土器が出土した。

縄文早期の土器の形式

土器は、輪型にした粘土を積み上げて成型してつくられるようになる。そのとき表面に縄を当てて転がすと、輪と輪の繋ぎ目が塞がれるため、ごく自然に縄の文様が付くようになる。正しく、これが「縄文土器」の名称の由来となったのである。

「撚糸文系土器」は、撚り紐を丸棒の軸に巻いた原体(絡糸体)「絡」は糸をからめる(=)を回転押圧してつけて施文した、尖底深鉢型の土器であるが、土器原体を回転しないで、そのまま土器面に押圧した文様のものは、絡糸体圧痕文(らくじょうたいあつこんもん) (軸に絡まった糸、縄を押し付けたときにできる跡)ー土器と呼ばれている。

「撚糸文系土器」の標識遺跡の一つ、夏島貝塚は、神奈川県横須賀市夏島町に所在する縄文時代早期・初期の最古級の貝塚で、下層から出土した土器の一群には「夏島式」の名称が付けられ、「標式遺跡」となった。「夏島土器」は、文様が単純で、底が尖っていることを特徴とする(下図)。

また標識遺跡の稲荷台遺跡は板橋区稲荷台にある縄文早期の、そして稲荷原遺跡は、さいたま市見沼区春岡に所在する遺跡、また花輪台貝塚は、茨城県北相馬郡利根町にある縄文早期の遺跡として知られている。

「貝殻・沈線文系土器」の沈線文とは、木、竹、貝などを引きずって、直



出展 <http://komatsu0513.heteml.jp/natsusima.html>

線や曲線を描くもので、押捺^{おうちゅう}するときもある。沈線文系・「田戸下層式」土器の模様は、しの竹を半截してその割れ目で沈線を付けるものだが、「条痕文系」では、貝などの腹縁で土器の表面に条^{じょう}を付ける。

田戸遺跡は早期の田戸下層・上層式土器の標識遺跡で、神奈川県横須賀市田戸台に所在する。「田戸下層式」土器はユニークな形の尖底^{せんてい}をもち、また、丸底で口縁に小さな突起のあるものもある。

田戸下層式土器には、天狗鼻状の鋭角な尖底深鉢が多く、砲弾形の器形をもち、口縁部は平らなものと波状のものがあり、厚くて、緩く外側に反って、外削ぎ状となっている。文様の要素は、太・細沈線文に加え、貝殻腹縁文、爪形状刺突文やボタン状の貼付文も多く用いられるが、縄文をもつ例もある。文様のモチーフは胴部全面を横位の数条の沈線文で分帯し、鋸歯状文・三角形文などを充填している。文様の变化から時期細分が試みられ、新しい段階ほど小渦巻文や曲線文が増える。関東全域から中部・東北部にわたる広い分布圏を有するが、下総台地北部の分布密度は群を抜いて高い。下図は、成田市で出土したもの。

「条痕文系土器」は・・・

土器の外側、内側の全体に、平行の細い筋が無数に認められるもので、この筋は、木の板や二枚貝の縁辺部分などを用いて、器面を整えるさいに残された調整のための条痕である。規則正しい方向に調整することによって、同時に装飾効果をも得ている。貝殻を用いたものは貝殻条痕文といわれている。縄文時代前期以後、後期を中心として、その後、様々な時期に認められる。弥生時代にも伝えられ、弥生土器として、各地で出土している。

「条痕文系土器」は、横浜市野島貝塚を標式遺跡とする。ここで出土した「野島式土器」は、一般的には、鋭角の尖底深鉢を基本形態とするが、平縁のほか、緩やかな波状口縁を呈する個体も多い。胴部上半に主文様帯を有し、微隆起線文で曲線的なモチーフを描き、その間隙を集合沈線（沈線文とは、篋^{かぶた}や竹などで線を掘った文様）で埋めるものや、刺突文・沈線文・凹線文で×字状・三角形の直線的な区画文を描く土器がある。また、貝殻条痕文のみが施された土器を多量伴って出土する。条痕文系土器全般を通じて、胎土に繊維が混入される。



田戸下層式土器

成田市東峰御幸畑西遺跡出土 千葉県教育庁
文化財課森宮分室展示室展示



野島式土器

船橋市飛ノ台貝塚出土 船橋市飛ノ台
史跡公園博物館展示

条痕文土器群は、貝殻条痕文を地文に用い、胎土に繊維を含む。子母口式↓野鳥式↓野鳥式↓野鳥式↓茅山下層式↓茅山上層式の順に変遷する。沈線文土器ほどの文様の華やかさは無く、繊維を含むために脆くて、一見すると、粗雑な土器に見える。

子母口式は沈線文系土器と条痕文系土器をつなぐ型式で、文様には、絡条体圧痕文を多用するほか、貼付文（粘土を土器の表面に貼り付けて、装飾効果を高める文様の総称、代表的なものに、器面を全周するように、帯状の粘土紐を貼り付けた文様として、貼付突帯文や、棒状浮文・円形浮文などがある）や、刺突文（竹管、へら、貝殻などの先端を刺突する文様）で構成される。

鵜ヶ島台式土器は、横須賀市鵜ヶ島台遺跡を標式として設定され、茅山下層式よりも層的的に先行することが確かめられた。やや揚げ底状の平底深鉢が主体で、口縁部に4単位の小突起を有し、頸部と胸部の二か所で屈曲する器形を特徴とする。頸部の屈曲を境に上下二段の文様帯が構成され、各々微隆起線文、沈線文で幾何学モチーフを描く。また文様の交点に円形竹管文、半月形刺突文が加えられる特色をもつ。土器には、口縁部に円柱状の小把手がつかものもある。土器内面・外面下半には貝殻条痕文が深く明瞭に施される。

鵜ヶ島台式土器

八千代市間見穴遺跡出土 八千代立

郷土資料館展示



茅山式土器の型式設定・・・

横須賀市佐原で発見された茅山貝塚は、カキを主体とする純鹹貝塚（海に棲む貝類からなっている）で、沖積地に東に突き出した台地の尖頭部にある。ここから出土した土器から、茅山式土器の型式が設定された。この土器は、多量の繊維を胎土（土器本体をつくる原料、粘土や砂など）に含み、貝殻条痕文で器面が成形されている。この茅山式土器は、野鳥式、鵜ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式の各型式に順次細分され、器形の面で、野鳥式土器は尖底の深鉢だが、鵜ヶ島台式以後になると平底が一般化し、土器胴部には段が出現する。

茅山遺跡出土土器

横須賀市自然・人文博物館所蔵



そのころ志木市内では・・・

各遺跡で、多数の「茅山式」土器が発見されている。このころ（早期末葉）志木市内の縄文人の住み心地は良くなったようだが、丁度、市内の低地に海水の侵入が激しくなり、内海での食料の獲得が始まったからではないか、と推測されている。条痕文系土器の分布は、柳瀬川右岸の台地全域に亘っていて、形式も揃っている。しかし、住居跡・土坑などの遺構は未だに発見されていない。定住するまでには到つてはなかったのではなからうか。

打越遺跡は・・・

新河岸川の支流、富士見江川に形成された支谷に分布する遺跡で、富士見市立みずほ台小学校を含めた周辺地域に位置している。これまでの調査で、旧石器時代から中世までの遺構が多数確認された。縄文時代前期の貝塚遺跡として戦前から知られていたが、近年、組織的な発掘調査によって、縄文時代早期末の大規模な集落跡であることが確認された。

縄文時代早期末の土器が出土し、標識遺跡としての打越遺跡から出土した土器は、基準土器として認定され、「打越土器」と呼称される。この土器は、ヤマトシジミのほか、マガキ、オオノガイ、ハイガイほか、出土した貝殻の縁を使用して文様をつけ、尖底で、砲弾に似た器形を特徴としている。

下吉井式遺跡は・・・

横須賀市に所在し、下吉井式土器は、ここを標識遺跡として、二次堆積した土器であるが、関東南西部を中心に静岡や長野・群馬県などにも分布している。下吉井式土器は、口辺部に隆帯や沈線や渦巻や波状の文様を描くのが特徴で、胎土には繊維を含むものが多く、丸底に近い尖底



打越遺跡出土土器

富士見市水子貝塚公園資料館所蔵

の土器である。下図に示すものは、平塚市北金目字溝ノ尾に所在する北金目塚越遺跡で出土した。重複する二軒の竪穴住居跡から検出され、十数個体分が確認されたが、殆んどが、完形あるいは復元が可能な個体だった。また、このうち二軒からは、滑石製の「玉」が、6個まとまって残されていた。装飾品が広く、普及し始める時期に当たっていたように、周辺からも、けつ状耳飾りになる可能性のある垂飾や玉が見付かっている。

◇縄文早期につづいて前期には・・・

地球規模で温暖化に向かい、環境の変化が短期間のうちに起こる。「前期」（およそ五千五百年から七千年前）に入ると、海面は上昇して海水が侵入し、現在の東京湾が北に延伸されて、「奥東京湾」が形成される。さらに北上して東西に二分さ



れ、紀元前六千年ころには、西側の入江は川越近くまで入り込む。

「縄文海進」の時代へ

「海進」と呼ばれ、海面は三メートルくらい上昇して、現・柳瀬川の流域は「古入間湾」と呼ばれる水域と化した。志木市の東方に当る宗岡地

下吉井式土器と玉

(約6,000 - 6,500年前)

復元高36.4㎜

玉の径は、14 - 17mm

平塚市博物館所蔵

区は海面下に沈み、志木地区との境界は海岸となる。

気温は今よりも一、二度高く、温暖な気候のため、湧き水や海産物が豊かな丘陵の崖線には人々が好んで集まって居住した。

「羽状縄文土器」の発見・・・

「縄文時代前期」とされる貝塚から、矢羽状の装飾（図柄、様式）の文様（図柄）をもつ土器が発掘された。「羽状縄文」と命名された由縁については、古武芸の一つ、「弓道」に由来する。明治、大正、昭和の時代を経て、規格化され、また組織化されて、スポーツとして普及した「弓道」にヒントを得たものである。

矢羽は矢に取り付けられる羽で、一本の矢に使う羽は裏表に揃えられる。そこで、弓道では、時計回りに回転して進む甲矢（はや、早矢、兄矢とも）と、その逆の乙矢（おとや、弟矢とも）との一対を一手ひとてといい、甲矢から射る。

羽状縄文の土器類の文様は、右と左に捻ひねって撚よられた二本の縄（原体）を交互に回転して施紋する方法で作られ、縄は、矢羽のように、時計回りと反時計回りの双方に捩ねじられている。現代では広く使われる「右ネジ」に対して、ほとんど使用されない「左ネジ」（逆ネジ）形式が、双方、ほぼ対等に関係で取り入れられていることに注目したい。

羽状縄文系土器の文様はキラリテイをもち、「対掌性」の認識は、実に、古代と現代とを繋いでいるのである。

矢と矢羽・・・

矢は、弓の弾力を利用して発射される武具（狩猟具）として、東西を問わず、使われてきた。矢の代わりに「箭」の字も用いられる。矢羽やばねは矢に取り付けられている羽で、単に羽（は）と呼ばれることもある。鷺、鷹、白鳥、七面鳥、鶏など様々な種類の鳥の羽が使用されるが、特に鷺や鷹といった猛禽類の羽は最上品として珍重され、中近世には武士間の贈答品にもなった。使用される部位も手羽から尾羽まで幅広いが、尾羽の一番外側（石打と呼ばれる）が最も丈夫で、また希少価値も高いために珍重される。

鳥の羽は反りの向きで表裏があり、これを半分に割いて使用し、一本の矢に使う羽は裏表を同じものを揃えることができるので、一対、二種類の矢が作られ、矢が放たれて、前進したときに時計回りに回転するのが甲矢（はや、早矢・兄矢とも書く）で、逆が乙矢（おとや、弟矢とも書く）である。甲矢と乙矢あわせて一対を「一手（ひとて）」という。



矢羽（鷺）

下が甲矢で上が乙矢

矢羽は、矧（はぎ）と呼ばれる糸で籠（へら、竹の部分）に固定される。このうち鏃側（鏃は、ぞく、やじり）、の矧を本矧（もとはぎ）、筈（はず、矢の末端の弦側の矧を末矧（うらはぎ））という。そこで、矢を作ることを「（矢を）矧ぐ」ともいう。

矢羽の数によつて幾つかの種類があり、二枚羽は原始的な羽数で軌道が安定し難いが、儀式用として儀仗に用いられることとなった。飛ぶ軌道の安定性を得るために四枚羽としたこともあるが、矢が回転しないため、最終的には三枚羽となつて、矢を回転させ、鏃の的となる対象物をえぐり取り殺傷力が強化された。現在競技で用いられている矢は、すべて三枚羽である。

「羽状縄文土器」は、制作するとき、胎土（原材料の土）の中に植物の繊維を混入させた縄文土器としても知られる。縄文土器は、縄文時代早期及び前期の土器に顕著に見られるが、土器の焼成が一般に不十分で、表面の繊維が抜け落ち、細かい溝となつたものが多い。但し、内部の繊維は炭化して残存し、断面は表面の白っぽい部分に挟まれて漆黒色に見える。繊維は、主としてイネ科のような葉や茎が繊維質の植物の繊維をよく精製したものを使用したと考えられており、壁土に混ぜるような粗い茎や草をそのまま使用したものではない。土器の底部以外では、繊維は横に走っていることが多いが、これは、土器を粘土紐の輪積みによつて制作するため、

予め粘土紐を引き延ばす工程で、引き延ばされた粘土ひもに伴つて、混入された繊維が横に走るようになったものと推察される。

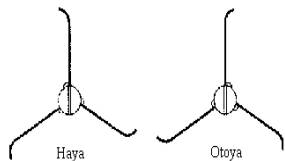
繊維を混ぜたのは、粘土の粘性を抑え、乾燥の際の亀裂を防ぐためと考えられ、関東地方では、早期中葉の田戸上層式から縄文土器が現れ、前期中葉の黒浜式を最後に消失した。

縄文土器は裝飾的に・・・

縄文土器を制作するために、繊維を粘土によくなじませて締まつた胎土にするために、様々な縄文が発達した。例えば、関東地方では、花積下層式、関山式、黒浜式に、羽状縄文を初め、コンパス文、ループ文などの縄文が隙間なく器面に施された。

「関山土器」と「黒浜土器」

関山式の縄文原体は、複節、複々節といった複数回にわたつて撚つた非常に複雑な縄であることが知られている。東北地方では、円筒下層式土器に羽状縄文が発達し、北海道南部では円筒下層式の系譜をひく土器群が製作された。北海道中部から道東地方にかけては、北筒式という独特な繊維土器が作られた。関山式土器は、縄文前期、約6,500年前のもとき、奥東京湾に沿つた埼玉県蓮田市の関山で発掘された。



甲矢と乙矢

「黒浜貝塚」は、蓮田市に所在する。大宮台地の縁辺に立地する縄文時代前期から中期とされる群小貝塚である。ここから発掘された「黒浜式土器」は、胎土に多量の繊維を含んでいて、繊維は焼成によって炭化し、断面は漆黒色で、この時期特有の「羽状縄文」をもつ。

右撚り（Z撚り）の撚り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり、左撚り（S撚り）の撚り紐を同時に、縦において横方向に転がすと右上がり左下がりで縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文したり、順番に分けて鳥の羽のように縄文を器面に施文する技法が使われており、これが「羽状縄文」の特徴であることはすでに述べた。

蓮田市内の貝塚群について・・・

埼玉県の東中央に位置する「蓮田市」は、市内中央を南東方向に向かう「蓮田台地」と、その東部に並ぶ「黒浜台地」とを占め、「大宮台地」の一部を形成している。また、その間を流れる元荒川及び西の境を流れる綾瀬川周辺の低地を含み、 \curvearrowright 東北本線（宇都宮線）及び東北自

動車道が市内を縦断している。

縄文時代前期（約6千年前）には、すでに述べたように、温暖化によって東京湾が北上し、「東京湾」を形成しており、蓮田市の遺跡群はその湾岸に迫っていた。

西側では、「関山貝塚」が発掘され、また、東側からは、「黒浜貝塚」が発見され、これらの貝塚群から出土した土器が、それぞれ「関山式土器」と「黒浜式土器」と呼ばれる由縁である。考古学で、これらの遺跡は、「標識遺跡」として、また、発掘された土器は、「標識土器」として指定された。そこで、これらの遺跡、土器類は、縄文時代の遺跡の年代を知るための基礎資料となっている。

花積下層式土器は・・・

奥東京湾を隔てて、蓮田市の対岸に位置している「春日部市」から、「花積貝塚」が発見され、そこから出土した。この土器は、「関山式土器」に先行する型式と推定されている。胎土に繊維を多量に含み、撚りの異なる原体を結束した「羽状縄紋土器」である。

花積という地名のハナは^{はなわ}塙の類語で台地のこと、スミは住むの意であるという。縄文時代から住むのに好適な台地だったことを、この地名は表している。



黒浜式土器

深鉢型の羽状縄文土器

高さ45.6cm 胴回りは、

上から口径40.5cm 頸部

径28.0cm 底径 11.5cm

羽状縄紋土器の文様

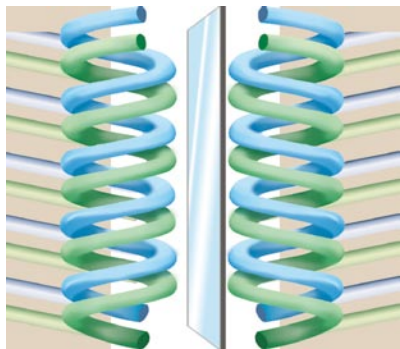
ここに示した土器は、縄文前期の代表遺跡として著名な、松戸市の「幸田貝塚」から出土した深鉢型の「羽状縄紋土器」で、その一部を拡大した図から、鳥の羽のように縄文を器面に施した、古代人の見事な技法が垣間見られる。現代人として、驚嘆せざるを得ない。

試みに、この文様を作ってみよう。右捻りの捻り紐を縦におき、横に転がして左上がり、右下がり、右捻りの捻り紐が平行に並び、左捻りの捻り紐を同時に、縦において横方向に転がす、右上がり左下がり、縄目が平行に並ぶ。

その掌体（鏡面に対して）をつくり、これらを粘土のような柔らかい面に押し付けねばよい。一对のより紐で、粘土の表面に羽状縄文土器の文様が出来る。

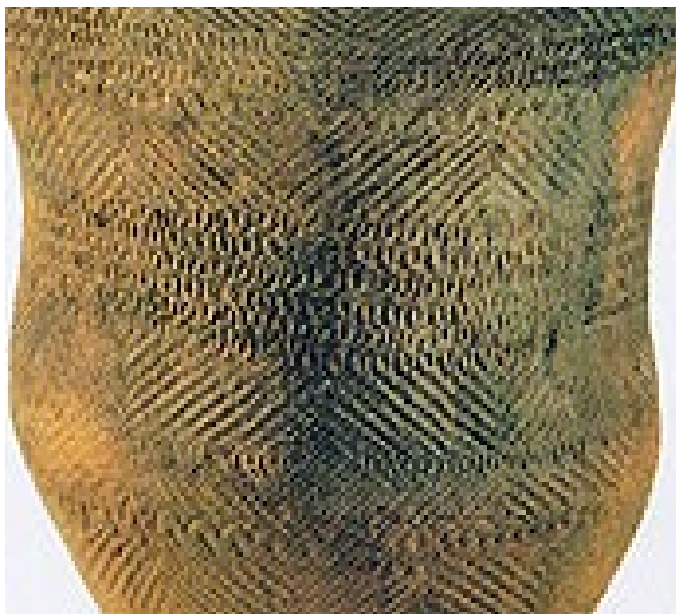
左図に示すのは、縄文土器の文様モデル

中央に鏡を置き、左右には、二本の茎（又は藁）を、それぞれ左と右に捻った鏡像体の紐（又は藁）と、これを、それぞれ粘土面に押し付けた土器の文様



拡大図

左右の縄文が交差した文様、
一对の対掌体を文様とした部分



松戸市の「幸田貝塚」から出土した、深鉢型の「羽状縄紋土器」

・A

AMS(Accelerator Mass

Spectrometry)法 75

・D

土器編年 80

・E

Edward Silvester Morse 74

・H

矧はぎ 94

蓮田市 96

花積下層式土器 97

編年 79

標準遺跡、基準遺跡 83

甲矢はや(早矢・兄矢とも書く)

93

・J

条痕文系土器、野島式土器 87

縄文海進 77

縄文人 74

縄文土器 73

縄文土器の文様モデル 98

・K

貝塚 78

加速器質量分析法 75

茅山式土器 89

黒浜土器 96

古人間湾 77

水子貝塚 78

モース 74

・N

夏島式土器 85

日本人のルーツ 72

・O

大森貝塚 74

打越遺跡 90

乙矢おとや(弟矢とも書く) 93

・S

志木市埋蔵文化財センター 75

関山土器 95

織維土器 94

・T

竪穴式住居 76

多縄文系土器 82

田戸下層式土器 86

爪形文系土器 81

・U

鵜ヶ島台式土器 88

羽状縄文土器 92

・Y

矢羽やばね 93

撚糸文系土器 85